

## 芸術・スポーツを題材にした教育の方法と技術

——主体的・対話的で深い学びの授業づくり ——

門脇早穂子\*・小口あや\*・吉野聡\*

(2020年2月25日受理)

Teaching method and technique on art and sport

: A lesson design in order to proactive, interactive, and deep learning

Sakiko KADOWAKI\* Aya KOGUCHI\* and Satoshi YOSHINO\*

キーワード:新学習指導要領, カリキュラムマネジメント, 逆引き設計, マインドマップ, バックキャスト思考

新学習指導要領改訂により、学習指導において「主体的・対話的で深い学び」に関して強調されている。その中でも深い学びへと導くことができる「カリキュラムマネジメント」という用語が使用され、「教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」(カリキュラムデザイン)が求められている。これは、従来から行われてきている教科毎に特定の内容を分離的に学習させるのではなく、教科横断的な視点から学習者へ望ましい資質能力を身に付けさせることの必要性を示しているのである。そこで、達成目標を先に明確にした上で、児童が何を身に付けるべきか、どう評価するかを設定した上で、何をいつまでにどのような形で学習すればよいのか、逆算しながら授業設計を行う「逆引き設計」の方法で、教科を超えたまとまりのある教育活動を実現する。今回は、芸術・スポーツを題材にした授業づくりとして「盆踊り」を事例に、教員が全て手立てを示すのではなく、児童を中心に計画することで児童自身が全体像を把握し、主体的な活動へと導く提案をする。思考を整理する方法として、マインドマップやバックキャスト思考を使用し、指導者として考えるべき授業構想や設計に言及した。

### はじめに

新学習指導要領(文部科学省, 2017、文部科学省, 2018)の発刊を背景に「主体的・対話的で深い学び」を促す学習指導の重要性が至る所で強調されている。学習者の主体的な学びが重要だと言う指摘は古くから行われてきたが、学習者同士あるいは教材など対人、対物との対話を通じた深い学びがここまで強調されたことはなく、またここまで急速に全国へ流布することも大きな社会変化が背景となっている。

---

\* 茨城大学教育学部 (College of Education, Ibaraki University, Mito, Japan)

特に深い学びを保障するうえで鍵概念としてよく「カリキュラムマネジメント」や「逆引き設計」という用語が使用される。カリキュラムマネジメントとは、学校教育目標を実現するための①全体計画、各教科等の領域内容を俯瞰的に見通して単元を配置する②単元配列表、及び各単元を俯瞰的に捉えて一つ一つの授業の位置づけを把握する③単元計画の作成が必須であると言われているが、なかでも「教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」（カリキュラムデザイン）こそが、最も重要であると指摘されている（田村, 2019）。つまり、従前から構成されている教科毎に特定の内容を分離的に学習させるのではなく、教科横断的な視点から学習者へ望ましい資質能力を身に付けさせることが優先的に強調される。

他方、逆引き設計とは学校段階、学年、学期、単元などまとまりをもった教育活動に対する達成目標を先に明確にし、その実現に向けて何を身に付けさせるべきかや、どう評価するかを先に考え、それらをどのような順序で学習させていくかを逆算しながら授業設計する考え方のことであり、京大を中心とする研究グループが活発に標榜してきた考え方である。

学習者の主体的・対話的で深い学びを促す授業づくり、カリキュラムを俯瞰的に捉えた学習指導、学習目標を実現可能な達成目標として具体的に捉える教師としての資質能力を育成する必要があるが、それらを教科毎に組織される大学学部の授業で実現することは極めて難しい。また、主体的・対話的で深い学び、カリキュラムマネジメントや逆引き設計をキーワードにした研究は新学習指導要領（文部科学省, 2017、文部科学省, 2018）の発刊を契機に数多く公表されるようになったが、それらの鍵概念を結び付けてどのような授業を展開していくかまで踏み込んで行った研究も見受けられない。

本稿では将来的に各学校でリーダーとして活躍できるよう設置される教職大学院で行う授業をターゲットに芸術・スポーツを題材にした教育の方法及び技術の授業を構想・設計することにした。特に特定の教科内容に縛られることなく、特定の題材を元にカリキュラムを考えたり達成目標を先に具体的に捉えながらどのように学習者の主体的・対話的で深い学びを促すかを考えながら授業を構想することにした。

### 芸術・スポーツを題材にした授業づくり

協働的な目的達成型による学びを実現する場合、その目的を達成するためには、何をいつまでにどのようにすればよいのか、逆算して考える必要がある。これは、教員が全て示すのではなく、児童を中心に計画することで児童自身が全体像を把握し、主体的な活動へと進めることができる。

そこで、図1のような6週間に渡る例を示す。計画図は、現在から6週間後までの流れを書いたもので、目的達成に向けて行うことを大きくA・B・Cと3つ挙げている。またそれぞれの内容を達成させるために必要な方法として、Bの下部にあるようにa・b・cと示している。このa・b・cは、Bを実現させるために必要な深い学びである。ここで示したA・B・Cに関して始める時期は異なるが、それぞれが独立した内容のものではなく、相互に作用することで目的達成へと導くことが可能となる。

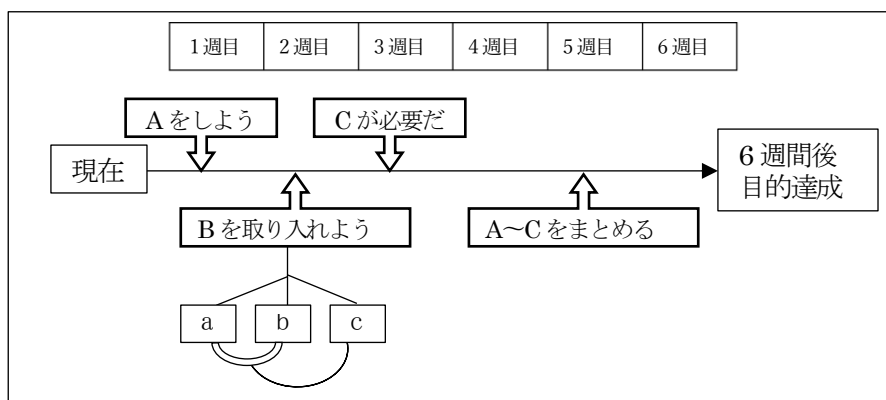


図1 協同的な目的達成型による学びの計画図(6週間の場合)

今回、例として「盆踊り」を題材に音楽・美術・スポーツの協働的な学びを考える。新学習指導要領において特に音楽科では、我が国の郷土の音楽など伝統や文化に関する教育の充実が求められている(文部科学省、2018)。盆踊りは、日本の様々な地域で行われ、地域ごとに特色の違う伝統文化の一つとして挙げられることから題材とした。そこでまず、「盆踊りとは何か、何のために行うのか」という疑問を児童に投げかけ、盆踊りについて想起されること考えてみる。その時に、盆踊りを中心にマインドマップ<sup>1)</sup>を作成すると、ぼんやりとした盆踊りへのイメージを整理することができるので是非取り入れたい。

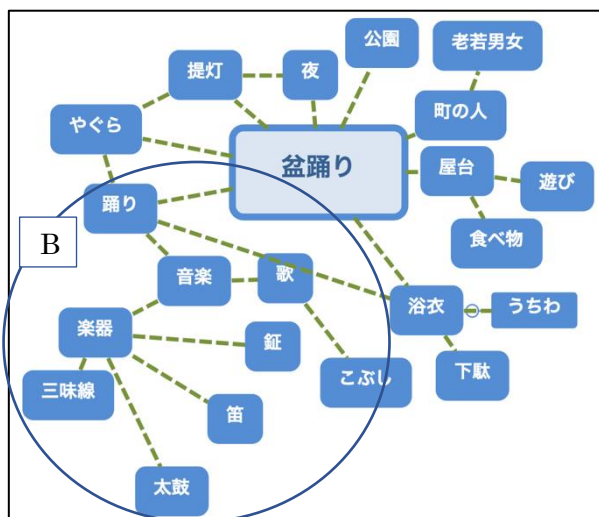


図2 盆踊りを中心としたマインドマップ

児童が盆踊りから想起されると思われることをマインドマップで表した例が図2である。この図では盆踊りを起点に、そこから連想される事柄や物等を放射状に記載している。今回は、児童自身の経験から見たことのある物を中心に出てきやすいワードのみ提示しているが、実際は経験した時の感情のワード等にも発展すると考えられる。このように、盆踊りに対するイメージを具体化した上で、阿波踊りや炭坑節などの全国的に有名な盆踊りを例に盆踊りが行われる背景を知った上で、自分たちの「小学校のオリジナル盆踊りを作って楽しむ」ことを目的とする。そこで、図1に

挙げたように、どんな盆踊りをしたいのかを元に行うことをA・B・Cに絞る。

この中でも音楽の側面から考える場合、丸で囲った部分が音楽に関する領域といえる。音楽活動では、音楽を聴くことで知り得たことを実践に生かしたり、実践から得た知識や技術を創意工夫する中で、鑑賞で新しい気づきを得たりする。これらは、対象のものに対し興味や関心を持つことで、主体的な学びとなる。また一人一人の価値観だけでなく、他者との対話的な学びの中で行われ

る。さらに、これらが意識化されることで、より深い学びとなる。そこで、音楽に関係する部分を図1のB部分として考えると、「〇〇小学校音頭を作ろう！」という目標のもと、授業を設計することができる。なお、この授業設計は、児童と教師とで考えられるとより良いが、その方法としては、目的に対して必要な事柄をバックキャスト思考（逆算して考えていく方法）で計画を立てると実行しやすい。具体的には図3の通りで、「〇〇小学校音頭が完成！」から順に考える。

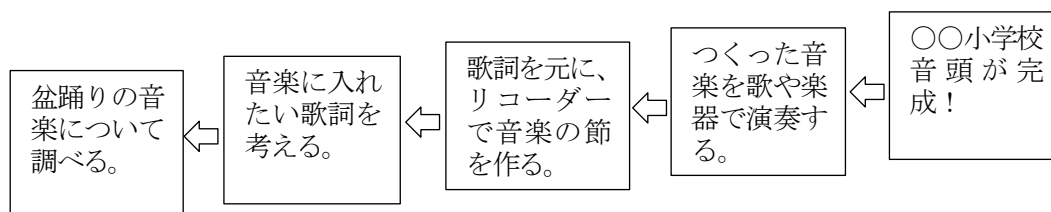


図3 バックキャスト思考による音楽の授業設計

図3を元に実際の授業とした時に、考えられる大きな授業の流れは次の通りである。

- ① 盆踊りの音楽を知る（鑑賞）
- ② 盆踊りを踊りと共に体験し、その音楽の特徴を掴む（鑑賞）
- ③ 特徴を生かした音頭づくり（音楽づくり）
- ④ 歌や楽器をつけての演奏の工夫（歌唱、器楽）
- ⑤ 作成した音頭を互いに聴き合い、音頭の特徴を捉えられているか、また踊りやすさの確認（鑑賞）

①、②の鑑賞活動では、各地の盆踊りを聴き比べることで、日本の郷土の音楽について知ることに繋がる。この段階を経ることで、盆踊りの音楽の特徴について児童自身が詳しくなり、その後自分たちの音頭を作るために必要なことが何なのかを考え、③、④への活動へ以降することができる。この活動は、①～④の順に行われても、②、③に戻り再検討することが予想される。また⑤は、③の途中段階でも行われる。

教師の役割として、最初の盆踊りとは投げかけは行なっているが、何を目的達成にするのか、何をしたいのか期間を含めた計画、またそれに伴った深い学びは、児童が主体的に学習できるようにする必要がある。そのため、各授業時間のねらいは、ある程度児童が設定できるように、教師の発問を通したサポートは不可欠である。教師自身が盆踊りについての教材研究を行うことは言うまでもないが、教師が内容の精査や整理を行うことで、現実的に実現可能な形になるようにしたい。

以上、一つの目的（本稿での例では「盆踊り」）を目指した学びを音楽の面から詳しく述べた。次は新たに美術・スポーツ面からの学びについても加えて述べることで、芸術・スポーツを題材にした主体的・対話的で深い学びの授業づくりの全体像に迫りたい。

「盆踊り」を行うために必要なことは図2に示したように様々ある。この様なことが集まって「盆踊り」という時と場が完成する。「様々なこと」の中には図2のBで示した音楽的な要素が強いために音楽面から迫るべきこともあるし、美術的・スポーツ的な面から迫るべきものもある。図4は、図2に美術的・スポーツ的な面から迫るべきものをそれぞれCとAとして示したものである。

点線で囲まれたCの「やぐら」「提灯」「浴衣」「うちわ」「下駄」は、美術的な面から迫るべきも

のである。ただし、そこで表される内容は、どのような盆踊りなのかによって決まる。盆踊りのテーマによっては、美術的な面においても力強い表現をすべき場合もあるだろうし、反対に繊細な表現をすべき場合もあるだろう。そしてそういったテーマの存在は、「何をどのように表すか」という美術表現において欠かすことのできないことを自然に指導することへとつながるはずである。

また、A で囲まれた「遊び」「踊り」はスポーツ的な面から迫るべきものであろう。これも先述した美術的な面からの学びと同様に、盆踊りのテーマに合わせた「遊び」や「踊り」になるはずである。

さらに、この図では音楽に関する B とスポーツに関する A が重なっていることがある。図 4 左中央の「踊り」である。それぞれの事象は音楽・美術・スポーツの三つに明確に分けられるものばかりではなく、「踊り」のように音楽・スポーツ両面から迫るべきものもある。さらに「美」という観点で踊りを見れば、音楽・美術・スポーツの三方向から迫ることも可能である。よって、指導者としては三方向からの指導の調整も必要となってくる。

どの項目においても、バックキャスト思考によって計画を立て実行することになる。その際注意すべきなのは、それぞれの項目指導者は A、B、C は個々に存在するのではなく、常に関連し合って進んでいくという意識を持つことである。それぞれは目的（本稿では「盆踊り」）が同じであり、そのためにテーマも同じであるということ、少なくとも教師は意識している必要がある。現在までに何がどこまで進んでいて、どのような課題があるかをそれぞれの項目で把握しているとよい。そうであればそれぞれが持つ課題を別の面からアプローチすることで解決することもできるし、よりよい方法があれば計画を変更し柔軟に対応することもできる。指導者には全体像を把握しつつ、その中で起こっている個々の出来事をつかみながら指導していく視点が必要である。

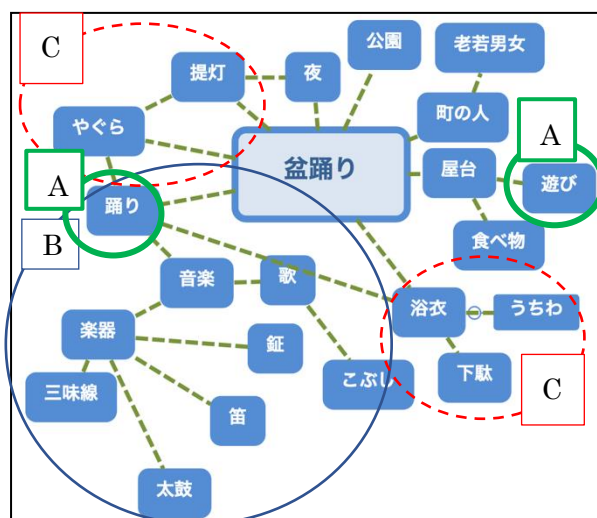


図 4 盆踊りを中心としたマインドマップ②

### まとめにかえて

本稿では、学習者の主体的・対話的で深い学びを実現するための教育方法及び技術について教職大学院で行う授業を構想した。特に新学習指導要領で強調されているカリキュラムマネジメントや逆引き設計といった考え方を中心にどのような授業づくりを行うべきかについて、芸術・スポーツ（盆踊り）を題材にした授業設計を試みた。授業自体は多面的に捉えた方法で構想することも可能かもしれないが、少なくとも一つの有益な授業例を提供することができていると考える。今後は実際の授業実践及びその成果についての分析を通してさらに有効な授業づくりを行っていきたくと考

える。

## 注

1) マインドマップとは、トニー・ブザン (Tony Buzan 1942-2019) が提唱した思考・発想法の一つで、頭の中で起こっていることを可視化した思考ツールである。マインドマップの特徴について、「a) 中心イメージを描くことにより、関心の対象を明確にする。b) 中心イメージから主要テーマを枝 (ブランチ) のように放射状に広げる。c) ブランチには関連する重要なイメージや重要な言葉をつなげる。d) あまり重要でないイメージや言葉も、より重要なものに付随する形で加える。ブランチは節をつなぐ形で伸ばす。」(ブザン, 2005) の4点が挙げられている。

## 引用文献

- 田村学. 2019. 『カリキュラム・マネジメント入門』(東洋館出版).
- 田村知子. 2014. 『カリキュラムマネジメント』—学力向上へのアクションプラン— (日本標準).
- Tony Buzan・Barry Buzan. 神田昌典 (訳) . 2005. 『ザ・マインドマップ：脳の力を強化する思考技術』(ダイヤモンド社) .
- 文部科学省. 2018 『小学校学習指導要領 (平成 29 年度告示) 解説 音楽編』(東洋館出版社) .